町内会デジタル化

北海道苫小牧市　拓勇東（たくゆうひがし）町内会 副会長　佐藤（さとう） 一美（ひとみ）

町内会のデジタル化までの歩み

北海道苫小牧市の拓勇東町は、世帯平均年齢が35歳で、子どものいる家庭の多い地域だ。拓勇東町内会が全国的に知られるようになったのは、町内会費のコンビニ払い導入が２０２２年にヤフーニュースで取り上げられたのがきっかけだ。この報道以来、全国の町内会から多くの問い合わせをいただいている。

私たちが提唱する町内会の「デジタル化」は特別高度なものではなく、「便利レベル」のものだ。当町内会は、次の３つの目標のためにデジタル化を進めた。１つ目の目標は、役員作業負担の軽減だ。メールやＬＩＮＥを使えば、情報伝達にかかる大きな手間や資源を削減できる。町内会の役員は全員ボランティアであるため、稼働時間の短縮や業務の効率化は特に重要である。２つ目は、写真で活動の様子を発信する際の作業の効率化だ。この課題は、パソコン上のフォルダ等の整理、クラウドやドライブの利用、FacebookなどのＳＮＳを使うことで一括解決できる。３つ目は、コミュニケーションの強化である。年代によるライフスタイルの違いから連絡が難しいという問題があったが、ＬＩＮＥやメールを利用することで時間をあまり気にせずに連絡が取れるようになり、結果として役員や会員間のコミュニケーションが向上した。

町内会設立時点（２００９年）は電話やＦＡＸが主要なコミュニケーション手段であり、デジタル技術を導入するまで10年以上の歳月を要した。一度はデジタル化を諦めかけたが、最終的にそれを実現できたので、本日こうし

拓勇東町デジタルヒストリー

01	2009年	メールアドレス、ブログ、QRコード
02	2012年	Facebook、LINE、こくちーず（イベント告知申し込みフォーム）、オンライン会計ソフト
03	2020年	ZOOM,役員グループLINE、各部LINE
04	2021年	役員iPad配置、Instagram、Google Form、Google Drive、会報原稿
05	2022年	町内会費コンビニ払いの管理プログラム

10年以上！！

デジタル完全孤立期

て報告することができる。

コロナ禍における町内会活動

コロナウイルスは世界中に大きな苦難をもたらしたが、コロナ禍がオンライン化を促進したのも事実である。

２０２０年６月には、町内会の会議をオンライン化することができた。２０２３年４月からは、役員会に会館またはオンラインの二方式で参加できるようにした。自宅からでも参加できるようになったことで、多忙なお母さんたちにも喜ばれた。

２０２１年１月からは、シニア世代の役員のデジタル化に取り組んだ。部長たち全員にiPad購入のための一部補助を行い、年度末に支給される役員活動費で相殺する方式を採った。返済期間（４～５年）は役員を辞任しにくいという効果も含めた。この期間に会館にWi-Fiを整備し、様々なアプリの活用も始めた。iPadのノートアプリで文書を共有し、ペーパーレス化にも取り組んだ。一生ガラケーを使うと宣言していた役員たちも、iPadを使い始めるとこんなに便利なものはないと常に持ち歩くようになった。

ここまでデジタル化が簡単に進んだかのように紹介したが、役員たちに自身のメールアドレスとパスワードを思い出してもらうことが最大の難関だった。大学生にマニュアルを作ってもらい、その後も特別補習が必要となったが、着実にスキルアップできた。デジタル研修２年目はCanva講座を行い、Zoomの背景などを制作した。３年目はＤＸとＡＩ研修を行った。カリキュラムは、私が代表を務めるＮＰＯ法人への外注である。アシスタントは若手役員にバイト代込みで依頼し、皆のスキルアップにつなげた。シニア世代の役員たちの中には、デジタル技術の使い方に困ったら若い役員にすぐ聞くことができるという安心感があるようだ。「役員iPad配置事業」は毎年続き、今は副部長たちへも対象を広げている。デジタル化により、役員が事務にかけていた時間は大幅に短縮された。

コロナ禍で町内会＝飲みニケーションという昭和スタイルからも完全に脱却し、懇親会ではなく研修会を開催するようになった。お酒の無い席なので高校生役員が同席できるようになり、年齢の壁を越えた活発なコミュニケーションが実現した。

デジタル技術活用行事

この４年間で、デジタル技術を活用した様々な行事を実施してきた。福岡県久留米市校区まちづくり連絡協議会事務局との交流研修会や、コミュニティ政策学会での事例発表をオンラインで行った。コロナ禍２年目からは、会場でも行事に参加したいとの声を受け、参加方法を会場とオンラインの二方式とした。日本南極地域観測隊として活動した柴田さんの講演会はこの方式で行った。

その他、地元の大人たちが、卒業生（小・中・高）に向けて仕事の経歴や経験を話す場「オンライン夢ミーティング」を実施した。地元の若者たちに、地域に進路の相談ができる大人たちがいることを知ってもらうことができ、地域内に新たなつながりが生まれた。オンラインでの行事は、会場設営や撤収の作業が不要である他、場所や時間の制限がないため気軽に参加でき、コミュニケーションが活性化されるという利点がある。

町内会内各専門部のデジタル行事を紹介する。２０２２年、新千歳空港周辺環境整備財団の騒音対策の助成金でiPadを購入し、最初に老人クラブの行事を行った。講座では思い出の写真をデジタル加工してコラージュした。大切な写真がスマホからいつでも見られるようになったことで、喜びの涙を流す方もいた。次に町内のメイクアップアーティストをお呼びして「素敵なポートレイト撮影・加工会」を実施した。これは、子ども向けの撮影会が大好評だったことから、シニアの皆さんの要望を受け、実施したものだ。グーグルアースや国土地理院地図を使った取り組みも行っ

た。自宅を上空から見た様子や、ナスカの地上絵などを見た。生まれ故郷の住所を入力して、60年ほど前の様子を見たときには、皆さん感動しておられた。その他にグーグルレンズやＣｈａｔＧＰＴの使い方講座を行った。

子どもたち向けの行事として、今年は４年ぶりに青少年サマーキャンプを実施した。アメリカ、メキシコ、アフガニスタンの方々の話を聞き、それをヒントにiPadを使って謎解きする「多文化共生脱出ゲーム」を実施した。

また、今年度から「ちいき安全塾」という行事を開始し、iPadを活用した地域安全マップづくりを行った。小学校低学年は写真や折り紙などを使い、高学年はデジタルツールを使用した。高学年が作業を早く終えて低学年を手伝う流れが生まれ、年齢を超えた協力が促進されている。ちいき安全塾のカリキュラムは、グーグルドライブでたたき台を共有し、そのデータに直接書き込む形で役員から意見をもらい、共同で作り上げた。

このように、デジタル技術を活用した行事は、外部の視点や専門知識を容易に共有でき、言語の壁を超えて海外にまで視野を広げることができる。画像や写真などのデータは日時や場所を自動記録するので、次世代の役員への継承にも役立つことだろう。

対面での研修も増えてきた。本年は夏祭りがあり、徹底的に子どもたちを楽しませるため、バルーンアートやフェイスペイントなどの研修を開催した。拓勇東町内会で育った子どもたちが、他地域にはない特別な思い出を作れるように奮闘した。当町内会では、毎年同じ人が同じことをするのではなく、高校生から80代まで、世代を問わずみんなで学んでいる。コロナ禍を経て、役員たちの意識は大きく変革した。デジタル技術は、新たな世界との出会いをもたらす入口になる。

昨年、全国自治会連合会大会に参加した際、会場の95％が年配の男性だった。なぜ、女性や他世代の連合会長がいないのだろうか。町内会のデジタル化は、このような問題に取り組む機会を提供し、より多様な参画者の獲得に貢献できるはずだ。

デジタル化の先に

当町内会にも課題はある。現状の加入率は33％であり、非常に低い。それでも１１００世帯、約５０００名の会員がいる。この規模は現状の役員体制でぎりぎり運営できるレベルだが、それでも会員数拡大のため、町内会報ＰＲ版を毎年作成し、会員の家も含めて全戸３５００世帯に投函している。本年は町内会加入のメリットを大きく打ち出し、長い文章を好まない若い世代にも見てもらえるようデザインを工夫した。また、これまでの活動報告をＳＮＳで閲覧できるようにした他、町内会報をＬＩＮＥでダウンロードできるようにした。町内会の加入方法も3種類用意した。そのかいあって、ＰＲ版の配布直後に10世帯以上が加入した。

町内会があるのは人々の安全のためだ。いざという時に必要な連帯を築くため、意識的に活動することが重要だ。地域住民が日常生活の中で緊急時の対策や知識を得ることや、地域教育力の向上に大きな目的がある。デジタル技術であたたかいコミュニケーションを支え、共に成長していくのが、拓勇東町内会の未来へのロードマップだ。目的は数値ではなく、入りたくなる町内会、役員をやりたくなる町内会をつくることだ。デジタル技術の力があれば、より早く目的に近づいていけると思う。

【インスタグラム】

TAKUYU_EAST

【フェイスブック】
facebook.com/takuyu.higashi